

中間字幕

大正十二年九月一日午  
前十一時五十八分

烈震ひとたび帝都を襲  
えば、地裂け、家倒れ  
て  
——丸の内所見——

御茶の水附近

牛込区内所見

——丸の内ビルディング  
グー——

見る見る猛火は四方に  
起こりて、都は今をか  
ぎりの焰の海

関東大震大火実況全五巻 大正十二年九月

文部省社会教育課撮影監督  
東京シネマ商会撮影

第一巻

(大正十二年九月二日付け都新聞の紙面)

(未曾有の大震に大東京空しく焦土の文字)

(帝都の焼失総戸数は三十一万六千余戸／罹災民百三十五万余人／警視庁の調査の文字)

(東京大震災明細地図)

大正十二年九月一日朝、土砂降りの空にわかには晴れて、日はうららかに都大路に照りそい、二百十日の厄日もことなきを喜びて、平和に食卓に向かわんとするときしも、午前十一時五十八分、突如烈震は帝都を襲った。地は裂け家は倒れ、逃れんとすれば不断に来る余震のために怯えて足進まず、家々の瓦は落ち柱は折れてその下敷きとなる者数を知らない。  
(地割れした道路を歩き交う人々)

大建築物の隙間なく並んでさすが壯麗を誇りし丸の内一帯も瞬く間にあわれ惨たる巨大な裂け目を生じ比較的振動の緩かった山の手方面においてさえ崩壊した家屋おびただしく、牛込駅付近は地破れ特に甚し。四谷小石川方面は火災こそ免れたが、至る所家屋崩壊してあるいは軒に打たれあるいは梁に敷かれて哀れにも悲鳴を聞くさえもの凄いい光景であった。(間) (崩壊した家屋、ひび割れた道路) (大きく割れた路面アップ) 最新式建築として人目をそばだてた丸の内ビルディング、日本郵船会社、東京會館などの鉄筋コンクリート建ても壁は裂け柱は曲がって見るも無惨な姿となり、今赤壁と称せられた御茶ノ水も土崩壊滅して惨たる一場の廃墟と化した。地の揺らぎ相踵(あいつ)いで止まず、不安の色におびえてひたすら平穩を祈りつつありしも見る見る火災は四方に起こって都は今を限りの火焰の海と化した。綿を吹きたるが如き濛々たる空色は家を

消防隊が必死の努力も  
一閃の火焰に消えて  
――帝室林野管理  
局――

惨虐の火焰、渦を巻き  
て、生死も知らぬ阿鼻  
叫喚  
――神田方面――

――神田・神保町附  
近――

迫り来る猛火の前に  
――浅草公園附近――

一炬(いつきよ)の煙  
となり果てんとする帝  
国劇場

激震を冒し火焰を浴び  
て重傷者の救護  
――東京病院――

倒れた家をくぐって救  
助に努める勇敢な少年  
団  
――皇道少年団――

焼き人を焦(や)いた呪いの煙である。ここを先途と消防隊が必死の努力もただ一閃の火炎に消えて手を染むるすべもなく、市内八十余ヶ所から燃え上がった猛火は、折りからの烈風にそそられて力を得、猛り狂うて凄惨を極めた。強震と同時に水道鉄管の破裂のため全市は一斉に水を断たれて消防意の如くならず、僅かに堀の水を汲み上げて死力を尽くした蒸気ポンプも猛火の前には何の甲斐もない。帝室林野管理局の如き瞬く間に焼け落ちてしまった。一方、第一震と同時に火を発した神田方面は神田坂上から眼下に臨めば黒煙の空高く立ち昇って物凄く、火の唸り、風の喚び、残墟の火焰渦をまきて生死も知らぬ阿鼻叫喚、父母、妻子、兄弟の名を呼び交わす隙だになく、右に走り左に往き火に追われ烟に咽び家財道具も何のその、ただ身をもって逃げ惑う有様は真にこの世のものとも思われない。(避難する人々の群れ) (空を覆い尽くす煙)

(家財道具を抱え逃げる人々)  
(焼け落ちる建物)

(都電、彷徨う人々)

歓楽の巷浅草公園においては東の間に変わり果てたる有様、迫り来たる猛火の前に人々はただ茫然……としてなすところを知らず。(間) (川の向こうに黒煙) 火はすでに付近一帯を嘗めて向島サツポロビル会社の大建築も早や黒煙の包むところとなった。

丸の内方面では警視庁の一角から吹き出した焰は、忽ちその全面を包囲して早くもすでに帝都警備の根拠地を無からしめ、焰は次いで隣せる歓楽の館帝国劇場もすべてが焼けて煙となり果てた。

今の今まで華の都の大東京は恐ろしくも酸鼻の極みを尽くして阿鼻叫喚の巷と化したか、かかる混雑の際に早くも激震を冒し火焰をあびて重傷者を病院に運び、あるいは軽症者には応急の手当を施した。

なかならずく山の手方面にては青少年団の活動最もめざましく、逸早く救護隊を組織して倒壊家屋の下敷きとなった人々を救い出し身をもって罹災者の救護に努めた。(炊き出しの様子) 今や帝都も大震大火のためにその大半を失い、二方里余の面積、四十二万戸の家屋を

思い起こす欧州大戦の  
惨禍を  
白仏の廢墟に似た災害  
の跡  
――仏英和女学校  
跡――

面影いずこ一望の焼け  
野原  
――浅草、本所方  
面――

あわれ文教の府も……  
――文部省跡――  
――湯島聖堂跡――

万巻の書もあわれ一握  
の灰と化した  
――帝国大学跡――

須田町付近

焼かれ、百六十万近くの罹災者、八万の傷ましき死者  
を出し行衛不明者二十有余万人に及ぶ。実にその惨害  
の激甚なる有史以来の一大変災を現出した。

(焼け跡に入る少年団)

(救助者を担架に乗せて行く)

思い起こす欧州大戦の惨禍を、天を覆う猛火、土に  
敷く死屍、悽愴真に面の向けようもない。(間)フラン  
ス・ベルギーの廢墟にも似た仏英和(ふつえいわ)女学  
校校庭にひとり淋しく残ったジャンヌ・ダルクの彫像に  
禱りを捧ぐる尼僧の姿。

面影いずこ一望の焼け野原。

(一面の焼け野原)

あわれ文教の府も今は空しく数基の暖房跡をしのび、  
形ばかりの標石(ひょうせき)に名残をとどむる教育  
博物館、嘗ては壯觀帝都を庄せしニコライ殿堂の無惨の  
骸(かばね)。徳川三百年文教の淵源(えんげん)で  
あった湯島聖堂の跡。

さては僅かに赤門を残してあわれ医科、理工科、各教  
室ならびに七十余万巻の貴重な書冊と研究資料とを焼  
失した東京帝国大学、いづれ劣らぬ惨害目も当てられ  
ぬ有様である。

(瓦礫)

(焼け残った「東京医学会」の看板)

(渡り廊下?)

親知らず子知らずと都大路の繁華を誇った須田町  
(すだちょう)付近は、身の毛もよだつ生死の惨話に  
残り、万世橋は広瀬中佐の銅像をあますばかり、行き  
交う避難の人々はただ無心に廢残の駅を眺むるのみ。

(焼け跡のシヨットいくつか)

(神田大神切り通し下岩崎男爵邸内にお立ち退きの文  
字)神田明神も狂暴の火の手の見舞うところとなり、  
御神体は立ち退きのやむなきに至った。

京橋付近

(焼け跡) (ゆっくりパンする)  
見渡せば神田一帯ありし日の面影いずし。  
京橋もなければ日本橋もない。(焼け跡を歩く人々)

日本橋通り  
――残骸の三越呉服店――

流行の魁、三越呉服店に残るは名物の高塔「丸に越」の金文字ばかり。  
(行き交う人々、車、自転車。ひとりの男がじっとカメラを見ている)

――丸善株式会社――

お江戸日本橋も半ば崩れ、丸善書店の残骸ものすく――。

――白木屋跡――

白木屋呉服店はただ一片の焼土と化した。  
(カメラ、パンする。焼け跡を行く人々)

――焼けた汽車、電車――

骨のみ残る電車や汽車の残骸を路傍にとどむるのみ。  
(土台だけ残った電車)  
(焼け残った電車のそばを歩く人)

至仁の大御心に人は皆  
感激の涙

第二巻(字幕と同時にスタート)  
(摂政宮、山本総理大臣のお召しに関する貼り紙)  
(貼り紙を見る人々)

家屋の倒壊と襲い来る火煙とに身をもって遁れた数多の避難者は極度の恐怖と疲労と飢餓とに、生きた心地もなかったが、三日も過ぎて翌四日辻々に貼られた号外は坐るに人々の感激の情を起こさずに置かなかった。

九死一生、僅かに逃れて  
――両国橋付近の避難民――

天皇陛下は痛く今回の大震災に御心を痛ませ給いて畏くも御内帑金(ごないどぎん)一千万円を御下賜せられたのであった。同時に摂政宮殿下よりは

「今回図らずも稀有の大地震は東京及び近県を襲い、之に加うるに大火災をもってし、その惨害の激甚なるは実に国家国民の不幸なり。予はその実情を見聞して日夜心痛に堪えず。殊に今日罹災者の境遇に対しては心深く之を傷む。茲に内帑(ないど)を頒ちてその痛苦を慰

大混乱のうちに応急の  
救護

めんと欲す。官民それ協力して適宜応急の処置をなし、もって遺憾なきを期せよ」  
との恵み深き御沙汰書を賜った。重ね重ねの聖恩の洪大なるにただ感泣するばかりであった。

(橋の袂に横になる人々)  
(雑踏)

震災を遁れた罹災者はあるいは家を求め親戚知人を尋ね、火焰に追われて親子骨肉生別離散し、親は子を尋ね、子は親を求め、妻は夫を、夫は妻を探し求めて右往左往し、余煙いまだ消えぬ焼野原に哀れはいとど増し行くのであった。なかんづく本所深川方面両国橋付近は、見る目も痛ましい有様で、災害のために負傷した者はいうまでもなく、疲労と絶食のために急病を発した人々が、警衛の軍隊に救われて橋を枕に横たわって居るなどその光景実に悲惨の極みであった。

歓楽の巷も死の影にか  
くれた浅草仲見世

また浅草方面歓楽の巷も、今は死の影に隠れて、在りし日の面影もなく、仲見世付近、奇蹟的に焼け残された浅草観音堂の慈悲の手に幾千の罹災者が収容されて万死に一生を得たと喜んで居るものもある。

(焼け跡の傍らを歩く人々)  
(公園に集まる人々)

――上野公園内――

下町一帯の罹災者の唯一の避難所となった上野公園は、焼け出された人々の群れに満ちて、南州翁銅像に限なく貼られた生存避難の通知の紙片には一枚一枚に幾多の涙が注がれている。(西郷隆盛の銅像)家族は、居らぬか。友人の生死や如何にと、不安の心を紙に記し旗押し立てて呼ばわり歩く人々。疲れに疲れて上野動物園前の石に一時の休養を貪る人々、皆悲しい心を胸に秘めて、語るも聞くも涙の種ならぬはない。(間)木に結びつけたささやかな机、誰が家の子である。読本をさして語り合う姉妹ふたり、母や何処、父何処と探し求める哀れさ。

――親をたづねて――

あるいは全身に受けた火傷の痛みも忘れて父母を慕ってひたすらに泣く稚児もある。上野大仏の首も落ち、石の地蔵も横様に伏し、東照宮の石燈籠は算を乱して

――雨風をしのぐよすがにも――

倒れて居る。(旗) (壁に貼紙) (「南元町和田一家」) (散乱する石灯籠)  
その間に造ったトタン板の仮小屋、生き残った男ひとり、倒れた石灯籠を早速の竈に馴れぬ炊(かし)ぎをするも哀れを誘う。

(仮の小屋に座り込む男)  
(灯籠を竈代わりに煮炊きをする者)  
(貼り紙)

雨風を凌ぐよすがにもと、未だ熱気の消えぬトタン板を引いて行く人、一族の者が雨露を防いで、寝られぬ夜半をせめてもの手枕に一睡の夢を結ばんと心ばせか。

(仮小屋が並ぶ) (干されている衣類) (七輪)  
中には焼け残った列車を仮の宿りに避難している者もある。総ての情景ひとつとして涙の種ならぬはない。

(「繁田保吉避難場」の貼り紙)

――一碗の重湯に生きて――

この混乱の間にあっても、応急救護の手段は至る所に講ぜられ、暖かい一碗の重湯は絶食の身にとりて山海の珍味よりも尊く、受ける人々は涙と共に啜って行く。

――此の握の飯は――

あるいは一握の飯に一族数人の者が一日の飢えを凌ぐ糧となり、破れた風呂敷を広げる老人、黒いハンカチに包む若者、焼け残った片袖を差し出す乙女もあれば、欠けた茶碗を大事に抱えて来る子供もある。

(行列)  
(飯を布に受け取る人々)

――蘇生の水――

水道は絶え、井戸の水は涸れて蘇生の水一滴一滴を求むる術もない昨日今日、糸よりも細い水の滴に列をなして順番を待つ人々の心や如何に。

(手紙代行業の貼り紙)

一家水戸へ行くと貼り紙を残して故郷の親戚知人を尋ねんと疲れた足を引き摺りながらとぼとぼと汽車路を歩む人々の群れ。

――とぼとぼと故旧をたどる――

(線路沿いを歩く人々)  
鉄道省必死の努力にわずかに通じ得た汽車には屋根と  
いわず、あるいは機関車の先迄も悲惨な人々の乗るに任  
せて悲しき心、重たげに故郷の方へ去って行く。

- (船着場の鉄道省の貼り紙)
- (大阪行きの船の乗り場テント)
- (船が出るのを待つ人々)
- (船が離岸する)

### 第三卷

救護保安に全力を尽くす内閣諸大臣  
――震災前と後の閣議場――

――閣議へ――

――閣議を終えて――

このたびの大震災の中に組織せられた新内閣の諸公は、寝食を忘れて、災害の善後を策するのであった。首都官邸の閣議へと急ぐは井上大蔵大臣続いては後藤内務大臣、岡野文部大臣。(車から降りる諸大臣)

閣議を終えて今、皇后陛下日光より御還啓(ごかんけい)上野駅御着のお迎えに急ぐ各大臣、まず先頭は山本総理大臣次は財部(たからべ)海軍大臣、田中陸軍大臣、平沼司法大臣、伊集院外務大臣、井上大蔵大臣、岡野文部大臣、後藤内務大臣、犬養逋信大臣、田(でん)農商務大臣。

救護、保安、復旧の努力のために  
戒厳令下の災害地帯

今回の震災に際しては、すぐに災害地帯に戒厳令を布かれた、司令部は三宅坂なる参謀本内、遙かに銀座一帯の焼け野原を俯瞰しつつ庭前には露営のテント、伝書鳩の車、兵士たちの居並ぶその間を急しく往復する、当時の戒厳司令官福田大將は正に不眠不休の活動である。

戒厳司令官福田大將

- (福田大將)
- (歩兵第三連隊の提灯)
- (兵隊たち)
- (立てかけられた銃剣)

救護本部  
内務省仮事務所

震災救護事務局は、焼け残った内務大臣官邸内の内務省仮事務所に置かれ、バラック建の事務所の中で治

本部を訪う山本首相

警視庁仮事務所

——自警団——

拳国一致博愛救護の熱情  
——芝浦海岸——

同情籠る慰問の品々

安維持、暴利取締、支払猶予の三大緊急勅令の適用に全力を尽くして、食糧配給の円滑をはかり、門前に出入りする自動車数十台、戦端のように忙しさに緊張ぶり。

その間山本首相は事務局を訪問し、後藤内相と共に局内を巡視して督励に務め、府市の救護と連絡呼応して萬遺漏なきを期した。

一方警視庁は、妻子を失い家財を焼いてもこれを顧みる隙なくひたすら保安の職責に深く思いを馳せ、昼夜をわかつた活動を続けて居る。

幸いに火災を免れた山の手方面では、自警団を組織して、一時混乱のため手薄となった警察力を補い、一面には火の用心などの警備に従事した。

震災の報一度全国に伝わるや、拳国一致博愛救護の熱情はひとつになつて災害地に集中した、陸路の交通機関を破壊されたため、あらゆる救恤(きゆうじゆつ)品は海路一途芝浦海岸に集まり、なかんづく海軍の目覚ましい活動によつて、あるいは軍艦に、あるいは船舶に、食糧その他の日用品並び建築材料等を満載輸送した。これがために当時罹災地における民心を安んぜしめた許りでなく食糧の配給は潤沢なるを得、罹災民は辛うじて飢餓を免れ得たのである。しかもただに日本内地ばかりでなく米国の偉大な同情、英・仏・露・支など世界各国からの人類愛の発露は、芝浦海岸に山と積み重ねた救護品の中に籠つて居る。(救護品の山)

涙の出るような同情の籠る慰問の品々は、全国津々浦々の人々から送られ、これを各種団体の手によつて、罹災者の手に渡されることとなつた。(間)あるいは愛国婦人会の如き下田会長率先して配給の任につき、(割烹着姿の女性たち)(行列)あるいは茗溪会(めいけいかい)の如き全財産をあげて慰問救恤に尽くした。(大八車やトラックの荷台に救恤品が積まれる)浅草第一高等女学校の焼け跡での配給所では罹災者数丁の列をなして静かに配給されるのを待つて居



骨肉故旧の安否を知ら  
しめんと……  
——帝国大学本部の情  
報部——

情もあたたかき食事を  
——女子大学救護  
班——

『お茶召せ』と健気な  
中学生

痛ましい傷病者に手厚  
い看護  
——赤十字社救護  
班——

る。在郷軍人などは馬車に衣類を満載して漸く寒さを覚える今日この頃焼け跡を巡って衣類の給与に務めて居る。

行方も知らず離散してしまった骨肉知人の消息安否を知らしめるため帝国大学本部では、末廣博士を団長に大学校内と上野公園とに情報部を設けて、大学生や高等学校生徒などが尋ね来る人々に対して色々の情報を懇切丁寧に一々案内をして居る。

情も温かい食事を哀れな罹災児童に配給する女子大  
学桜楓会会員。

(割烹着姿の女子学生たち)

(地べたに座ってかきこむ子供)

道行く人に「御茶召し上げれ」と茶の湯の接待をする健気な中学生(府立一中)、こうした同情博愛の発露は、至る所で見る事が出来た。

これと同時に痛ましい傷病者に対しては出来得る限りの手厚い看護を施し、可愛い女の手に幾多の傷病者を労わった尊い犠牲の物語は、枚挙に遑(いとま)がない。

(忙しく立ち働く医師、看護師)

(ベッドの上で授乳する母親)

(日本赤十字社正門)

日本赤十字社はすぐに救護の手配をつくして焼け爛れた人、痛手に泣く我が子を乳母車に乗せて来る人、杖を力に歩みを運ぶ人等を応急の自動車に収容して連日連夜救療の手を尽くした。

(車から降りてくる患者たち)

(タンカで運ばれる人々)

(メモをとる看護師)

(メモを患者に渡す)

(肩を貸して歩く)

――陸軍軍医学校――

陸軍軍医学校では破壊された校舎に傷病者を収容して  
岩田校長はじめ切開に注射に力の限りを尽くした。  
(手術の模様)

――帝国大学附属病  
院――

ことに重傷者を収容せる帝国大学附属病院内の悲惨な  
有様は誠に見るに忍びない光景であった。(近藤、塩  
田両外科) 血に滲んだ包帯、紫色に焼け爛れた手足、  
死者に勝る無惨な光景。  
(床に横たわる患者たち)

惨死した母の乳を求め  
て泣くあわれをさな子

惨死した母の乳を求めて泣く哀れな嬰兒が看護婦の手  
に抱かれながら、亡くなった母親の胸を思って牛乳の乳  
房を離れかね、吸いながら眠る有様いずれか涙の種な  
らぬはない。

言葉なく唯だ涙の  
回向  
――被服廠跡――

悲惨の中にも悲惨を極めたかの被服廠跡、数万の死  
者に涙の回向、「どうぞ皆さん参拝してください」と  
香華(こうげ)を売る人も買う人も皆この広場で親兄  
弟に生き別れた人々であるう。(間) 茫茫たる原一  
面、秋風寒く吹き渡り、耐え難い異様の臭気は、線香  
の煙に交じって、南無阿弥陀仏の声も涙に咽び、合掌  
の手震えて面を覆う。  
(林立する卒塔婆)

ああ！いたましい骨の  
山

見渡せば嗚呼痛ましい幾基の骨の山、読経の声、鐘の  
響き、坐るに人の世の無常を思わしめる。

(骨の山がいくつか)  
(手を合わせる人々)  
(読経する僧侶)  
(日蓮宗のテント)

『父さんも母さんも兄  
さんも姉さんもみんな  
死にました』と孤児の  
収容  
――青山女学院――

こうした一家全滅、親兄弟に死に別れた悲惨の陰  
に、ただ生き残った人の子ひとり、お父さんもお母さ  
んも、兄さんも、姉さんも、皆死んでしまいましたと目  
にいっぱい涙をためて答える、寄るべない孤児を収容  
した青山女学院を訪えば、一時の遊戯に寂しい笑顔を  
作る無邪気な子供心のいじらしさ、ひとり淋しく玩具

死者三万二千余り  
被服廠の生き地獄から  
——僅かに生き残った  
四人——

に遊ぶ子もあれど、ありし日の妹を思つてか他の子の髪を撫で上げてやる少女もある。

被服廠三万二千の生き地獄からわずかに生き残った四人の子供、中に乳母が死をもつて守つた血の懐に辛うじて一生を得た四歳の幼児も居る。

(抱かれている女の子)

#### 第四卷

復興の努力

わずか一昼夜の間に人類の力の結晶である、あらゆる文明の機関を破壊し、幾十万の生霊を奪つた大惨害はまことにおそろしい力である。

さあれこれに怯まず屈せず人類の努力はなされなければならぬ。災害の煙も絶えぬ中より發揮せらるる建設の努力こそ最も尊むべき大精神である。罹災地はいうに及ばず、北は北海道より南は台湾まで、青年団在郷軍人等をはじめ、幾多の団体は罹災地救護、帝都復興のために奮起した。

大きな荷物を肩に、陸路幾十里を歩いて来た朴訥な青年団員は明日をも待たず、その日から跡片付けに従事し、朝鮮人の団体相愛会の如きも会長李起東(イ・ギドン)はじめ幾百人の団員挙つて無報酬で焼け跡の片付けに努力をなすべき旨申し出で、国粋会会員は自ら進んで死体の取り片付けを志願した。(電柱に登る工兵隊)中にももつとも目覚ましきは工兵隊の活動で、電線電話の架設、続いて破壊された全市の橋梁の架設等、あるいは水に入り土にまみれて必死の力を尽くした。厩橋、吾妻橋、神田橋その他大小幾十の架橋、実にその努力の賜であつた。(架橋の様子)(橋を渡る人々)

——浅草十二階の残骸  
爆破——

中にも、危険と困難と莫大の経費とを費やしたのは、各種残存建物の爆破であつて、最も苦心の存するところであつた。(壁に穴を開け、電線を繋ぐ)(内部から上方を見るショット)

職業紹介

浅草十二階の爆破には撮影技師は決死の冒険を敢えてして、百五十メートルの近距離から撮影したものである。  
 (爆破とともに崩れる十二階)

震災のため各方面において数十万の失業者を生じたが、東京市は逸早く職業紹介所並びに人事相談所を設けてこれが救済に任じた。

思い思いの生活に

こうした大災害のあとを受けた人は、思い思いの業務に生活の資(もと)を求め、あるいは各所に現れた林間理髪(間)あるいは幾百の大道の飲食店に。  
 (間) (ウイスキ五十五銭)

(「品川、上野間往復」の貼り紙)

なかにも最も奇抜なのは昨日まで荷物を積んだ馬力が、今日は乗り合いの馬車と早変わったことで、見渡す限りの焼け大路に唯一の交通機関となったのもおかし。見よ、満員の乗合自動車、数丁にわたる列をなして順列に乗り込む電車の有様、そこには災害の尊い教訓が含まれて居るではあるまいか。

(「電車にお乗りの方は順列に願います」の看板)  
 (電車に乗り込む人々)

力強い建設へ

力強い建設へ、これが復興のモットーである。交通の復旧に全力を尽くす電車工夫の汗も尊く、慣れぬ手に鉋を握ってバラックの建築を急ぎ釘を打つ槌の音にも力強い響きが伝わる。

バラックと天幕の生活  
 ——九段所見——

バラックや天幕は罹災者が唯一の家で、しかも畏くも宮城前の広場、新宿御苑その他の御用地をそれぞれ開放せられ、ここに出来た天幕の町、加うるに日々送らるる各地からの慰問袋、糧米、副食物、衣類等様々の物の救護、今更に人情の温かさを思わずにいられない。

聖恩かしこし——。

(天幕の家々) (天幕近景)

(大八車の後を歩く子供)

(救援品の配給に集まる人々)

聖恩かしこし  
 ——宮城前——

教育第一

(天幕村の俯瞰)

罹災児童に対する教育第一の意気は、早くも徹底して日本少年団聯盟は、野外少国民学校を日比谷新音楽堂その他随所に起こし全国の小学児童から罹災児童へ送られた筆、墨、手帳に力をこめた教育を授けることが出来た。

(青空学級での授業風景)

(手を上げる子供たち)

(暗転)

(紙面)

廃残影もない横浜市  
——横浜駅——

関東を襲った今回の大惨害は、横浜を中心に、湘南一帯において最もその凶暴をたくましくした。廃残見る影もない横浜市、先ず駅頭に一步を踏み入れてその惨状に驚く、プラットフォームはただ鉄筋の残れるばかり、

——税関とその付近——

税関付近の光景に至っては、悲惨言語に絶し、見渡す限り全滅し尽くした市内には、人の影さえ稀である。

——税関から眺めた山下町付近——

わずかに焼失を免れた倉庫も、ほとんど倒壊して用をなさず。税関から山下町付近を望めば、ただ崩れ落ち壁のみ残すその惨たる影を水に映じて居るのみである。

(横浜港の遠景)

(崩れた建物のそばを通る人々)

グランドホテルの跡で

世界に名を知られたグランドホテルの跡を辿れば、鉄橋は落ち土地は陥没してホテルに残るはただ炊事場の煙突一基のみ。遠く埠頭を望めば、影もないメリケン波止場、五、六の船の淋しく停泊して、ありし日を忍ぶ面影もない。

——歩むすべもない山下通り——

一步山下町通りに進めば昨日まで洋風の街路にさすが殷賑を極めた内外商館の跡形もなく、幾多の死骸を包む瓦礫は山と積まれて歩む術もない光景である。

(暮れてゆく瓦礫の町)

力の限りを尽くす市の  
救護  
――市役所仮事務  
所――

市役所が必死の努力も、手のつけようもなく……  
(屋根の上の人影)  
(ビルの前の風景)

罹災者乗車證を求め  
て……  
――跡かたもない桜木  
町駅前――

跡形もなき桜木町駅の焼け跡には、罹災者が乗車証明  
を求めて、淋しく列をなして居る。  
(混雑する窓口)  
(啞えタバコで対応する職員)

水を、水を……一滴も  
貴い此の水  
――横浜税関唯一の給  
水――

水！水！一滴も尊いこの水は、横浜関内唯一の給水所  
であって、幾十万の人々に運ぶ水船は、命の親にもま  
して貴重である。  
(頭に桶を乗せて歩く人)

壊れた岸壁に船をつけ  
て  
――救護品の陸揚  
げ――

陸路を絶たれた湘南一帯は、無惨にも破壊し尽くさ  
れ横浜埠頭を唯一の頼りに糧食の荷上げに、陸海軍が  
必死の努力をして居る。計量器の傾き壊れ臨海鉄道の  
破壊せる埠頭は痛ましきまでに壊されてしまった。  
(アズマ運輸部のトラック)

跡片付けに努力する米  
国水兵  
――海岸通り――

復旧の努力に働く米国水兵の姿、壊滅の横浜には一入  
の痛ましさをまして居る。  
(瓦礫を片付ける兵士)

永久に忘れ得ぬ大災害  
の日  
大正十二年九月一日

嗚呼願れば永久に忘れ得ぬ大災害の日、大正十二年  
九月一日、百十五億余円の財宝はひと筋の煙と化し  
て、十余万の生霊(せいらい)一瞬に滅し、一府四県  
を通じた世界未曾有の大災害、

夕暮迫る焼原に立ちて

夕暮れ迫る焼け野原に立てば、一陣の凄風惨として衣  
を払う。

(焼け野原)  
(暗転)

時は……大震に停止し  
 たまま悲惨の時を語る  
 ——中央気象台の時  
 計——

しかも時は午前十一時五十八分四十五秒、大震に停止したまま中央気象台の時計はとこしえに悲惨の時を示して居る。  
 (時計台の文字盤)

第五卷

天変地変にも揺るぎない  
 大内山の御尊顔

震災当時、両陛下には日光田母澤御用邸に御滞在中であらせられ、摂政宮は赤坂離宮に、秩父宮は那須野にいらせられたが些かのお障りもなく御安泰にわたらせられたことは、国民の齊しく慶福に堪えぬところである。畏くも宮城内内部にあつても被害の箇所も少なくないと漏れ承るが、今まのあたり二重橋、御車寄せなど厳(げん)として存するを拜しては、さながら心強さを感ずること国民の至情であらう。

皇后陛下災害御視察と  
 傷病者御慰問

皇后陛下には、九月二十九日日光御用邸より御還啓あり、午前十一時二十分廃残の趾をわずかにしつらえる上野停車場に御降車あらせられ、すぐに上野公園に玉歩を進められた。

上野の山に立たせ給いて  
 ——災害の状況を聞き給う——

(上野公園より御視察の様子)  
 後藤内相、湯浅警視總監、立花参謀総長等御案内申し上げ、遙かに一面焼け野原を御俯瞰あらせられた。  
 (俯瞰の街並み)

罹災傷病者御慰問  
 ——帝国大学病院——

陛下にはついで十月二日午後一時東京帝国大学附属病院に御成りあり、ここに収容せる傷病者を親しく御慰問遊ばされ、仔細に御視察あらせられた。病院長よりの説明を、首肯しつつ御憐愍(れんみん)の情深き御様子。

(床に並んで横になっている患者たちをご覧になる皇后陛下)

摂政宮殿下御視察

見渡す限りの焼土とみ  
そなわせられつ  
――上野山上にて――

惨たる焼け跡に立たせ  
給う  
――本所深川方面――

罹災者に御下賜の被服  
を御裁縫の久邇宮御一  
家

妃殿下  
良子（ながこ）女王殿  
下  
信子女王殿下  
――御居間にて――

皇后陛下が至仁至慈の  
御思召を体し寝食を忘  
れる  
宮内省巡回救護班

（赤坂離宮正門を出る摂政宮）

赤坂離宮におわします摂政宮殿下におかれても、この度の未曾有の大震大火の惨状を御視察されんと、九月十五日ご乗馬にて赤坂離宮を御出門、上野に向かわれた。

（橋を渡る）

（山上にテーブル、椅子が設られ、東京市長、警視總監、戒厳司令官より説明を受ける摂政宮殿下）

上野公園山王台西郷南州翁銅像前にて、見渡す限りの焼土を初めてみそなわせられつ、およそ三十分あまりの御視察。この摂政宮殿下の御微行は上野公園に避難していた人々には事前に知らされることになかったため、その御姿を遠くから拝した避難民たちは驚きと感激の涙を禁じ得なかった。

（焼け跡にテーブルと椅子）

その後同月十八日、自動車にて麴町、万世橋などを経て上野駅からご乗馬にて和泉橋、厩橋を経て横網町の被服廠跡で亡くなった生霊を弔わせられ、永代橋から赤坂溜池の罹災地を御視察あそばされた。

（馬上の摂政宮）

（騎乗の列）

（縁側に並んで裁縫をする女性たち）

恐れ多くも久邇宮御一家におかれては、罹災国民のための御下賜品として、御家中の皆様はもちろん、妃殿下御手ずから御裁縫あそばされた。

（居間にて運針する久邇宮御一家）

（宮内省巡回救護班の文字のある車）

（次々出発する車）

皇后陛下は、特に産科、婦人科、小児科の患者の療養に御心を痛ませ給い、この上なく恵み深く慈悲深きその思し召しを受けて、宮内省巡回救護班が設けられた。東京においては全部で八班にわかれて受け持ち区域を決め、皇后陛下の意を胸に、寝食を忘れ、労苦を厭わ



ず、昼と言わず夜と言わず、専用車両、また仮設の屯所にての診察治療、避難所に赴いての往診に、その全力を奮った。

(車内での診療)

(仮小屋を訪問診療する医師たち)

(立ったまま診察する)

(車内で聴診器を当てる)

(看護師の「宮」の字の腕章)

(宮城の景色)

「関東大震大火実況」全巻の終わり。